

芦屋大学論叢 第74号

(令和3年3月22日)抜刷

## 間主体的関係の視座に基づく心理療法の目標

林 知 代



## 間主体的関係の視座に基づく心理療法の目標

林 知 代

### 1. はじめに

Freud が精神を科学の領域に確立すべく作り上げた精神分析理論は、時代の変化を背景にしながら発展を繰り返してきた。そして Freud に続く多くの研究者が実践的・臨床的研究をたどりながら今日に至っている。その流れは、人間が決して一人では存在しえないという根源的視野を見据えた、焦点を個人から関係性の方向へと移行しつつ変化している歴史といえよう。この流れの背景には、精神分析と密接に関係する子どもの発達論の発展がある。客観的に外側から子ども発達を観るのではなく子どもの側に着目し、子どもが体験している世界を通して発達を論じる方向になっている。このような視点は、セラピストとクライアント関係の探究に多くの示唆を与えている。本論においては人間の本質に基づいた発達を包含した精神分析的な心理療法の目標を、「主体」に注目し考察する。

精神分析では、両者が関わる際、相対立するとも思われる同一化と中立性、共感と客観性、主体と対象、心と身体、能動と受動、理論と情動など、相補的關係の中で両者の主体性の問題をテーマにしてきたといっても過言ではない。Freud が患者とより協働的な取り組みを選んだことに始まり、今日の間主体性理論の発展に至っている。

心理療法は何に向かって進むのかについて、本研究では、二項関係に陥る危険を学んだセラピストとクライアントが、転移・逆転移の中で互いが「生き残り」(Winnicott, 1972)、クライアントが主体としてまとまった自己感覚を獲得するためのプロセスであることを主題として考察を深めていきたい。

本論において、Freud をはじめ精神科医との関係では「患者」、心理療法について述べる際は「クライアント」と記している。

また Intersubjectivity は「間主観性」と訳され一般化しているが、筆者は、セラピー過程で両者が互いに主体として関わり合おうとしながら対象に巻き込まれ、主体性維持が非常に危うい状況をも生じるという流れの延長上に、intersubjective という語が表されているとすれば、「間主観：主観と主観」ではなく「間主体：主体と主体」という日本語をあてる方が二者関係の在り方をうまく言い表していると考え、本論で intersubjectivity の訳として間主体と記すことにする。また Subject と Object の対語も、主観と客観というより「主体」と「対象 (そうでないもの)」というニュアンスを含んでいる場合は、主体・対象で記していく。

### 2. 精神分析におけるヒエラルキー

Freud が治療を始めたとき、時代的には男性が物事の決定権を握る能動性を持つもので女性はそうではないものというくくりで男女間のヒエラルキーは明白であった。Freud が解剖学的には元来男女双方には「両性性」が備わっていることに触れる一方で、男女差イコール「能動性」と「受動性」の差であると述べたり(2011)、マゾヒズムが女性故のものであると考えたり、女性が未成熟な男性で、ペニス羨望を抱くという

考えにとどまるに至ったその背景には、多分に時代的価値観が存在していたといえる。

Freud は身体症状化に「抑圧」が起因していることに注目したが、彼のヒステリー研究当初においては、女性の身体的症状を催眠で治療する方法がとられていた。催眠をかけられるという受動的立場は、現代風に言えば薬物療法偏る治療と言い換えても過言でない。Freud が催眠技法を放棄したのは、患者側が催眠という受動的立場を拒否し抵抗することによって自分の主体性の回復を求めてあらがった結果であった。ヒステリーは、抑圧された性的契機が大きな意味をもつ性的神経症である、という Freud の独善的主張は、後に見直しを問われてしかるべきだが、Freud が催眠治療を放棄し患者自身の発話注目したことは、主体性の視点から考えると精神分析の跳躍の進歩であったと言える。

この経験によって、Freud は患者と協働（治療同盟）という作業を初めて可能にする基盤を作ったのである。当時の催眠療法の権威者シャルコーの力は絶対的なもので、患者は拒否できないという時代背景の中で、Freud が催眠を放棄したという行為は称賛に値する。しかしその Freud でさえ時代的影響を免れることは困難だったことが、彼の発達論や症例では検証されるのである。精神分析は患者とのかかわりの中で、平等ではない人間関係を基底とした二項関係、例えば医者と患者、権威的男性と反抗者、そして Freud の発達概念にもみられる男性と女性などの間に生じる問題を学問としてどう捉えるかを模索し続けた歴史でもある。こうした二項関係を背景にして症状として顕れたものを無意識の象徴として扱い、無意識にある渾沌を意識化する意味を問うことや、ただ苦しみを受動的に耐えたり否認したりするより直面化しそこに在るものの正体を知り、分裂を統合に移行していくプロセスが精神分析の本質である。

### 3. 自我理想化から主体化へのプロセス

#### 3.1 同一化から自我理想化へ

患者の催眠への拒絶は、もし分析家が Freud でなければ、いわゆる治療上の抵抗として捉えられ、それ以上の洞察には至らなかつたかもしれない。催眠を断念の後、Freud が精神分析の実践を練り上げていった過程は、治療者の威圧的な権威の座から自ら降り、患者が主体者として自己を確立するために設定される場を提供する第一歩であった。Freud 自身は催眠療法をあきらめ患者自身に発話させることで、「言語」を治療のツールとして活用する方法を考え、能動と受動のヒエラルキーに基づく関係が患者の自律に役立たないことに気づいたことがわかる。しかし米国ではその考えは発展、浸透していかなかった。というのは、第二次世界大戦禍を受け、Freud をはじめとする多くの分析家が亡命を余儀なくされた。そして精神分析は米国において根付いた一方でプロパガンダとして利用されたり、概念・技法を精神科医の権威と結び付けられ、それに縛られる結果を招くことになったという時代背景がある。

精神分析的な心理療法に限らず、開始時にはセラピストとクライアントの間に二項関係が現存している。つまり関係は平等とはいいがたいところから始まるのが実際のところである。心理的な能動と受動のヒエラルキーが存在するということである。二項関係心理療法つまり能動と受動のヒエラルキー的対関係を瓦解させることは、クライアントの自律を促し主体性を取り戻すことを意味する。このことは、上記の Freud の例が示すところでもある。

クライアントは往々にして主体性を去勢された状態である。彼らがセラピストに会う前に懸念するのは自分を発話者としてきちんと承認されるのかどうかであろう。権威の前に受動的に位置するもの、憐れむべき存在として貶められるのではないかとこの恐れを抱くといってもよい。またクライアントは Balint(1979) が

basic fault「基底欠損」(中井訳, 2017)と呼んだ, 感覚に関連する脆弱な自我状態に陥っている場合も想定できる。岡野(2011)はbasic faultを「何か自分の中にある不具合」と捉え次のように訳している。

He feels there is a fault within him, a fault that must be put right. And it is felt to be a fault, not a complex, not a conflict, not a situation. Second, there is a feeling that the cause of this fault is that someone has either failed the patient or defaulted on him, and third, a great anxiety invariably surrounds this area, usually expressed as a desperate demand that this time the analyst should not - in fact must not fail him. (Basic Fault, P21.)

「第一に、彼は何か自分の中に不具合 fault があると感じる。つまり直すべき不具合である。そしてそれは、コンプレックスではなく、葛藤ではなく、状況でもなく、不具合 fault であるというのだ。そして第二に、子どもは誰かが、自分を駄目にした failed, あるいはなすべきことを怠った defaulted on という感覚を持つ。そして第3に、このことはその領域に関して多大なる不安を起こさせ、それを今度は分析家には決して繰り返してほしくないという要求として表現される」。

クライアントの内心に、こうした顧みられずにきた basic fault を丁寧に扱ってもらい癒され欠損部分を埋め合わせたいと願う気持ちが存在する。岡野の視点から考えると、どうも具合が悪いと感じる感覚をセラピストとの関わりを通して大丈夫なものに変えたい、つまり自分として存在する実感を得たいということと捉えることができる。すなわち主体者として存在する自分の獲得といってもよい。しかし両者の関係が進む中で、一見主体者として見える行動が、実はセラピストを自分の自我理想に仕立て、自我理想に投影しているに過ぎないことがある。Freud(1972)が、患者はセラピストの権威を受け入れ、それと同一化することから自律性を感じることがある、と述べていることが生じるのである。セラピストに同一化し、彼を自我理想の位置に据えることで安心を得ようとする。しかし自我理想化は、クライアントの悪い対象(やり返す対象)と重ねて受け取られたり、過度にクライアントのよい対象と同一化しているだけであるので、よいか悪いかの対関係に分裂した相補的關係を招いてしまう。

同一化する他者にセラピストでなくとも、恋人であったりパートナーであったり崇拝するだれかであったりするが、Kohutが言う理想化対象と異なり、前者では自我理想化したセラピストは物事に精通しているはずで、受動者である自分を理解すべきで、求めを叶えてくれるはずという、原始的な逆転原理に従うところがある。同一化が自我理想を作り上げる源となるのである。Kohut(1978)の理想化対象は、子どもにとって対象とは別物である大前提が存在する。すなわち境界がある。また彼の言う「共感」は同じく、相手の立場や世界を感じる「感覚」は持っているが相手に融合しているわけではない。

Benjaminは、同一化の原理をマター・ブランコの考えである、無意識界のロジックには対称性が含まれるという理論に結び付けて考えている。つまり自我理想化されたセラピストが二元理論に巻き込まれてパワー・ゲームに加担する可能性について述べている。

マター・ブランコが或る哲学の学生との分析治療で、週の「四日目」のセッションをいつに設定するかが問題となった。彼は最初、患者にとって不都合な早朝しかできないことを伝えたが患者は全く納得せず、他の患者を最優先していると非難した。ブランコは患者の推論の誤りを指摘し、自分の仕事や他の患者のスケジュールをすべて開示するのは論外なので、これ以上説明をするつもりはないと伝えた。患者は数週間、怒りと非難、落ち込みを続けた。ブランコは彼に改めて、実際面を考慮しつつ新しい時間を見つけられるか調べてみる、但し実現できる保証はないと伝えた。すると患者の態度は変わり、治療者の関わりを現実的に認識できるようになった。

福本(2004)はこの症例について、転移に典型的で、感情の励起によって対象が一色で染められ、両親と治療者が述語的に同一視されたことを示していると説明している。主体性に基づく思考においては、いま

だ象徴化されていなかったり外傷的であったりする経験にまつわる受身性の域を脱せず主体の境界が不明瞭な場合、セラピストとクライアントは二項関係にどんどん引きずり込まれていく。セラピストは全知であるかのように扱われたり、または自身がそのように振る舞ったりすることもある。また外傷的出来事の再体験が持ち込まれた時、テーマは比喩的に取り扱われず、象徴化されない状態で直接的やり取りにとどまる。こうしたことは二次的外傷体験を誘発する場ともなりかねない。セラピストを自我理想とする危険性は、理想と現実の矛盾から生じるクライアントの期待と裏切られる臨床体験の中で、避けがたく起こってくる。時にはこれを覆い隠したりあいまいにして療法が進むこともある。

### 3.2 脱自我理想化へ

これを打破するためには客観的に知っていると言主張するセラピスト側の優位性を脱構築して、受動側の主体性に注目する必要がある。

Freud の症例の、アンナ・O が治療プロセスのなかで、自分の大嫌いな犬がボウルから水を飲んでいたので思い出して水を飲むことを拒むという行動（アクティング）は、身体症状の消失だけではなく認知や感情の生きなおしの必要から生じたものと Freud は捉えたが、セラピーが深まると、治療者もクライアントも相互作用から生じるどうしても避けられないこうした行動（アクティング）や転移・逆転移に巻き込まれて行かざるを得ない。特に関係精神分析では、セラピストとクライアントの二者関係に注目し、そこで生じる転移・逆転を扱うということになっていく。クライアントが、言語を介在させること以上に伝える手立てを試みようとすると、アクティングが起きる。Benjamin は、このアクティングは分析が進んでゆくための不可欠の媒体であり、それまでとは異なるやり方で無意識と意識の中間の新たな位置を占めつつある証左だという。

理由が明らかにされず症状として身体に表れている状態に支配されクライアントは、自身の身体に捉われながらも洞察を進め、ものをいう主体として自身に湧き上がる情動をはっきり言い表せることができるようになっていく。クライアントが取り入れている自己防衛パターンによる抵抗に時間をかけ、関わりを続けていく作業は、クライアントが自己省察を通じて抵抗を乗り越える道程である。いうなら催眠や薬物や権威的セラピストではなく、注目は、両者間で話された事柄がどういう風に“描かれているのか”，過去の意味が象徴的に形をかえるといくことである。

身体症状から象徴的発話のプロセスを経てそれまで言葉にならなかったものを言葉にしていくことは、カタルシスを起こさせる。Freud はヒステリーの身体症状の背後にある外傷的記憶を一つ一つ想起させれば症状が消失すると当初信じていたが、主体者として存在するためにはそれにとどまらない。感情に耐えうる思考と、他者の中に不快な感情をただ排出してしまうことは別であることを Bion は述べている。「ものを言う」だけでは認知や行為パターンが変わらないからである。

## 4. 母親の受身性と主体性－行為の受身と情動の主体

主体獲得は、関わり合いの中で他者に投影した自己を省察することともいえる。精神分析の発達理論は、そうした関わり合いを表すさまざまなメタファーを探求してきた。コンテインメント、ホールディング、自己対象、承認、情動調律などを挙げるができる。

Bion の概念では、赤ん坊は、母親に対していまだ消化されず自分ではその意味もわからないため生の感覚データ（ベータ要素）を排泄するが、母親はコンテナーとしてそれを受け入れ（コンテイン）、消化し

て考え可能なもの（アルファ要素）にして赤ん坊に返してやる。すると赤ん坊はそれを自分の中に据えておくことができ、その感情に耐えうようになり、それがさらに赤ん坊の思考の材料になって、抽象思考の機能が発達していく。思考というのは、感覚データをどのように象徴化し自分の中で消化しうるものに変える能力を意味している。母親にはアルファ要素に変換できる能力を必要とされているのである。

この能力は、Winnicott が、「対象と関係すること」から「対象の使用」への移行と表現した応答性に近いのかもしれない。母親が赤ん坊を拒絶したり罰で報復したりすることをせず「程よい good enough」応答を続けることによって「生き残る」と、赤ん坊は自分の万能的な空想には影響されない母親という外的存在に気づくことができるようになると彼は言う。

赤ん坊は母親の顔を見つめながら、母親が見つめているもの、つまり自分自身を見ている。赤ん坊にとって母親の顔は、鏡を見る以前にすでに自己を映し出しているのである。もし母親が強固な防衛的態度で赤ん坊に接するなら、あるいは反応の乏しい母親、顔の表情に乏しい母親であるなら、赤ん坊は母親の顔に自分自身を見ることはなく、母親の顔が鏡の役割を果たすことはできない。母親の顔つきから母親の機嫌を予知し、母親の表情に合わせて自分の欲求を抑制する赤ん坊もいるのだが、この予知があるレベルを超えると病的な方向へ進んでしまい、引きこもり、母親にまなざしを向けなくなる (Winnicott, 1972)。

母親と関係することから母親を使用することへの変化は、Winnicott によると主体が対象を破壊することを意味している。そして対象は主体による破壊から生き残ることで対象の世界で生活できるようになると彼は言う。そしてこの状態は、個人の情緒的成長の早期段階に備給された対象が実際に生き残ることを通してのみ、個人が到達できると位置づけている。これを治療関係にあてはめると、分析家は患者の鏡となることによって、患者自身が自己を意識し、自己を理解できるようになるということだ。それは、鏡になれなかった親の代わりをすることでもある。子どもは母親の顔だけでなく、父親や兄弟の顔、態度の中に自己を見出し、さらには鏡の中に自己を見出し、次第にそのことへの依存を減らしていくことになる。Beebe は 2018 年のニューヨークでの研修会で、この概念を用いて実践した自らのセラピーを DVD で放映し提示した。対人恐怖で他者と目を合わすことのできない過酷な成育歴を持つクライアントに、自身と彼女のやり取りを録画しておき、セラピーの後で二人でそのセラピーでのやり取りを観ることによって、クライアントが自分の情動体験を、Beebe のやや大げさに反応された表情や応答によって知ることを目的としたものであった。

Winnicott は母親を子どもの対象として、さらには、子どもにとって環境の一要素と表され母親の主体性を持った個として描いているわけではない。また彼の描く母親の姿勢は、一見受け身性を示している。「主体」である子どもにとって「対象」である母親が破壊されることから生き残ることができて初めて子どもが情緒発達を遂げるという表現で、母親が受け身的で没主体的に描かれている。Winnicott は母親を子どもの「対象」と位置付けたが、しかし主体がなければ子どもをホールドするものとして機能しないであろう。上記に記した Beebe の DVD からわかることは、母親と重なる役割のセラピストは決して受け身でなくクライアントの情動に調律する主体者と捉えることができる。単なる環境の一要素ではなく、相手に積極的に応答している主体者ということである。

“holding” は子どもが存在することのための居場所を提供する。母親の人柄や考え方が出る。主体者としての母親は子どもを抱えるため、きめ細やかで stable 安定し、reliable 信用ができて、dependable 頼れる、そして子どもが主体として存在できるために available いつでもそこに居てくれる。このような母親の状態は、自己防衛を不必要にして「本当の自分」を育成し「傷つきやすさ」を保護する。子どもはそこで安心して遊べることを通して、ひとりで居られる能力が生まれ、確保された内的空間が様々なキャパシティの起源となる。母親の身体的容器は自己を抱えたり、自己にまとまりを与えて、象徴的な思考を初めて可能にする。

同様、Bion の言う container も概念の違いはあるにしても子どもを抱えるという点で共通性を持つ。セラピー空間はこのような主体者としての母親の身体的容器の延長として存在するといってもよい。関係性精神分析の間主体性の原点にある、一人の人間と一人の人間が出会うところから、両者は影響を与え影響を受けざるを得ないと考えると、母親もどんなに幼くとも子どもも両者が主体者として存在していると捉える方が自然である。

このように考えると、アクティングや身体症状を通じてしか身体の緊張を解放することができない状態は、発話や象徴能力を欠いているというより、それ以前に基本的条件であるはずの関係性を欠いている結果だということができる。

## 5. 同一化、共感そして主体化

セラピストへの同一化が生じなければクライアントの主体が揺さぶりをかけられることもない。クライアントにとってはそれまでの自己を支えていたパターンが攪乱されることによって主体化に向けたセラピーが始まるといってよい。クライアントはセラピストに同一化し、自己省察を深め防衛や抵抗を乗り越えていく。しかし主体の獲得という視点から見ると、同一化には両者が別人格であるという前提を危うくさせる危険性を孕んでいる。

「ヒステリー研究」の中で、Freud は抵抗や防衛を乗り越えるプロセスについて、一步一步心的抵抗に時間をかけるなかで患者の中で知的好奇心がうごめき始めるので、分析家はそれを充てにできるようになるという。つまり患者を協働者とすることができるようになるのである。別な言い方をすれば、患者が探究者としての客観的関心をもって自身を観察するようになっていくという意味である。このプロセスに支持的なスタンスは、攻撃対象が何らかの形で現れて患者か分析家はその対象の役を演じるよう駆り立てられるときに、不可避免的に生じる二項関係を避けるための方法でもある。共感から離れず主体を確固としたものに達成することであり、攻撃する側になることも、攻撃される側になることも避けるということが大切である。

ドラの事例は、Freud でさえそのようなプロセスは簡単なものではないことを示している。Freud はドラが自分の批判的な心の働きを放棄して分析家にゆだね、分析家の理論的で秩序だった精神状態のもとで、彼女の発言を審判し理性でその矛盾や手掛かりを負いつつ記録していくのが良いと考えていた。しかしこのやり方は意図的で、患者をコントロールしたものであった。結果、抑圧された素材にアクセスできなくなってしまった。ドラの事例で、Freud は彼女が自分の夢理論を実証してくれるものと期待していたが、ロジックや理性から知的に考えたことが操作的で、転移的な困難が生じることを実証するものになってしまったのであった。自身のこの苦い経験を通して Freud は因果律に従った話を前提としてコントロールしようとしたら、破局的な結果がもたらされること気づいたのである。

Winnicott (1972) が提示した事例のなかで、二項関係から脱し、主体者として在るとはどういうことかについて示唆している箇所を、二項関係によくあるヒエラルキーがもたらす受動性、つまり主体性喪失状態のクライアントという視点から取り上げてみたい。(患者 A) の子ども時代は、彼女に能動性を持った主体者(無定形)であることを許さなかったばかりか、他人の型に合わせることを強いるものであった。人生早期にまず能動性を持った主体者(無定形)として始めるべきだということを理解してくれる者が、子ども時代には一人もいなかったのだ。そのことで彼女は自分を basic fault 基底欠損を持つ人間だと感じていたが(腹を立てたが)、セラピストへの信頼によって、能動性を持った主体者(無定形から)として存在すること



から何物かが作り得るのだと感じられるようになった。しかし、次のセッションで、彼女は分析医を喜ばせようと、必要以上に夢やその他の素材を報告しようとした。そこで Winnicott は、彼女が分析医の型に合わせてしまわないように、“能動性を持った主体者（無定形）”という言葉を使い出させた。能動性を持った主体者であること（無定形）は選択の自由に伴う不安をもたらしたのだが、次第に統制されるようになった。

## 6. 「知」の限界

同一化やアクティングは必ずしもクライアントに限ったことではなく、セラピスト側にも知的・技法的合理化という形で逆転移行動が起きる場合がある。Winnicott は「破壊」という言葉を使ってクライアントの行動化を象徴的に言及した。クライアントが対象を使用する能力を機能させるように、セラピストもより成熟しているとはいえ、クライアントという主体によって自分のセラピーの能力を攪乱され、まさしく主体が揺らぐことがある。セラピスト-クライアント関係において、セラピストが「生き残る survive」とは、「仕返しをしない not retaliate」（Winnicott, 1971）ことを意味する。セラピストが自己愛を傷つけられたと感じたとき、無意識的に自己防衛が作用して否認、抵抗や権威の行使が働く。このときセラピストが自身の心的作用に気づけるかどうか、患者とともに生き残るものとなるか生き残らないものとなるかを分けていく。「生き残った」場合は、クライアントにセラピストを自己の部分の投影物として使用し、肯定的変化が起ってくる。この一連プロセスはクライアントが主体性を構築していくうえでスパイラル的な形で続いていく。現代のセラピスト-クライアント関係においても、受動から抜け出そうとする患者の能動性を抵抗として扱い、精神分析家の権威を自己愛の合理化に利用することもありうる。解釈が治療者の防衛として使われる可能性もある。

精神分析は解釈を治療の中心に据えていた。近年においては解釈についての研究が進み、解釈中心の進め方に疑問が持たれているが、「ヒステリー研究」の Freud について Benjamin は、彼がまだホームズさながら「冷静沈着ですべてを超越した」捜査官で、合いかぎの束と、人の話の穴を見逃さない鷹のような眼を持ち、下手人が参りましたと降参する遺漏のない筋書きを組み立てようとしていたと述べている。こうした手法はパワー・ゲームで患者側が一切反論することはできない心理状況に追いつめ服従させる意図が働いている。一見理路整然とした治療技法の何が問題として浮上するかであるが、主体性の育成という観点からは、大前提に知っているものと知らない者という二項関係の上に成り立っていることからくる問題が生じる。つまり患者が本当の自分を出すと抵抗として扱われ、精神的内界も解釈で勝手に決められてしまうため、主体的自己の構築に必要な第一歩である、自己の解放（表出のされ方が関係性からは拙いとしても）の段階でセラピーは行き詰まってしまうのである。

だれもまだ言語化もままならない繊細な情動を、冷たい科学の万能鍵でこじ開けられたくはないものだ。Freud が、不完全さのメタファーである患者の発話に、意味の解読や秘密の暴露や出来事と症状を継ぎ目のない語りで矛盾なく解釈したことによって、ついには患者に対する至適な分析的スタンスを損なってしまったドラの事例を前述したが、「辛辣な」抵抗が、Freud にもう一度自らの立場を考え直させ、分析におけるヒエラルキーから起きる二項関係に基づくコントロールを放棄させた。そして彼は、肝心なことはただ、何事にも特別な注意を向けず、耳に入る一切の事柄に対して、“差別なく平等に漂う注意”を向けるだけのことであるとの結論に至ったのである。Freud が臨床体験から積み上げていったこれらの気づきは、クライアントに対する基本的態度を示している。心の捉われを排除しそこに執着せず心を柔軟にして、クライアント

のすべてを見る必要がある。十分にクライアントの話をきかないうちに、自分の枠組みにあてはめようとする、判断ミスや誤った見通しなどを生じさせるかもしれない。早計な判断は、ときにクライアントに有害ですらある。セラピー過程を台無しにすることもある。解釈でクライアントのいら立ちや攻撃を触発する前にクライアントが何を言いたいのか、クライアントの情動世界で何が起きているのかを今一度立ち止まってみることは、セラピスト側、クライアント側両者が主体を取り戻す間合いでもある。既にクライアントの怒りや攻撃が触発されている時はその時期が終わるまで待ち、そのあとに、以前何が起こったのかをクライアントと話し合う方がより適当である。

Benjamin (1998) は、Freud のドラの症例において、治療者がパワー・ゲームのリバーシブルな相補性へと陥ってしまった例として説明されている。つまり Freud は、復讐することしか考えていないと言ってドラを責めるが、まさにそうして責める中で、ドラを同じくらい復讐的に扱っていると述べる。科学に重きを置く Freud の「知」が作り上げた Freud の完璧な解釈を、ドラは冷たく拒絶して抵抗したのである。Freud はこのようなドラに対して自分の権威を誇示してしまった。これは治療場面で権威的立場から言葉を発することは功を奏さないことを示していた。

考えたり語ったりするよりも行動に走るクライアントは、セラピストを相補的な同一化への引きずり込み、表象として共有することからも、共感というツールの媒体機能からも、引き離してしまう事例として捉えることが可能である。セラピストはクライアントの行動の背後にある情動を上手く言語化へ対応することに失敗したといえる。クライアントの立場に思考の軸を置く、つまり共感するには、取り決められた科学性より情動の科学性を必要とする。ロジカルな科学性を優先すると相補的な関係の在り方に加担してしまい、結果的に知らず知らず行動を促してしまうことになる。クライアントの行動は、ロジカルに説明することや科学的助言によって、相手をコントロールし安心を得ようとするセラピストの行動の反転鏡像のようになってしまうからである。

Freud は失敗から「平等に漂える注意」というモデルに移行した。しかし Freud の「平等に漂える注意」や「精神分析に携わる医師の態度」は、後継者に浸透していかなかった。知的な技法に捉われた言語的解釈は精神分析の本質的特質ではなく、かえって解釈自体の持つ危険をもたらす捨棄すべきものとして考えることに焦点があてられたのは近年に至ってからである。

H. Racker (1982) は、逆転移を融和的逆転移と補足的逆転移とに分類している。クライアントはセラピーの過程で投影性同一視（投影同一視）という防衛機制を用いて過去の間人間関係パターンを再演する可能性があるが、Racker はセラピストの逆転移がクライアントの相手側に同一化する形をとるときを補足的逆転移と考え、患者の立場に融和的に同一化する場合を融和的逆転移と考えた。セラピストが融和的逆転移の視点をとることによって、セラピストはクライアント状態を知るすべを得るのである。融和的逆転移とは、クライアントが置かれているポジションに視点の軸を置いて、クライアントの属する世界を体験したうえで、セラピストはコンテナーとして、クライアントが主体者であることを感じる事ができる応答を投げ返すというプロセスになる。この一連のやり取りがうまくいけば「共感」を用いて主体性に焦点を当てたセラピーを進めることになる。これがクライアントの自己変容をもたらす過程となるだろう。

この変化は解釈的な作業からもたらされるものではない。やり返す・攻撃への質的な変化を起こさないという観念を付随要素として内包しているセラピストが、Winnicott 流に言うところの攻撃に attacks から生き残ることによってもたらされるのである。攻撃性は主体性を取り戻すための抗いとして理解できる。しかし特に、攻撃が、思い込みによるものが明らかであったりや妄想という形で表現されたり、クライアントの巧みな操作といった形で表現されたりすると、セラピストは巻き込まれ補足的逆転移対象として主体でいられなくな

り技法に捉われたりクライアントの攻撃に立ち向かう事は非常に難しくなったりする。こうした時の矢継ぎ早の解釈はむしろセラピストクライアント関係に分断を招く恐れがある。

このとき必要なのは融和的逆転移と補足的逆転移対象両方に身を置ける分析家の能力といってもよい。逆転移の中に巻き込まれると二項関係から単純に良いか悪いかのなかで溺れてしまう。むしろその中で泳ぐ仕方を身に着けることが大切である。治療者は、「共感」という浮き輪を活用して両者の主体という岸を歩き来しながら、クライアントが漂いつつ溺れない自己を構築することに寄与することになる。

## まとめ

心理療法のプロセスにおいては、セラピストもクライアントも転移の中に巻き込まれることを回避できない。その際、セラピーが何を基底に何のために何に向かって行われているかについてセラピストが意識化し一貫していることが重要である。

心理的な「不具合」を感じて訪れるクライアントと、「壊れない」ことを求められるセラピストが、臨床場面で転移・逆転移を体験しながら双方が主体として生き残っていかれるかどうかでセラピーの成果が問われるのではないかと考える。本論では、クライアント一人ひとりの歩み方は異なってはいても、体験の主体者として自身の在り方を決定する能力を獲得することを終結の目標とできるだろうとの考察を提示した。

出会ったセラピストクライアント関係の有り様は、それぞれ生誕から出会うまでの歴史を背景にしている。そのため同じ人間同士であっても、さらには同一人物でも互いが出会う時期や出会い方によって異なる関係のあり方を綴っていく。

その意味で二人の有り様は極めて特異的といってもよい。セラピーの場面では両者のあらゆる反応、例えば声色、表情、言葉の表現、話の文脈、間合いなどが関係に影響を及ぼす。

セラピーのプロセスは瞬間・瞬間が転移・逆転移に巻き込まれながら進むものといっても大げさではない。時には二項対立の関係の場面で相手を支配してしまおうとするパワー・ゲームに巻き込まれることもある。たとえ主訴として挙げられる症状の回復や状態の改善の具体的な目標があったとしても、二人が関わるかわり方はルールの上を進んでいくようなものではなく方向性は事前に全くわからない。その中でセラピストは何を基準に何を目標にするのかである。

精神分析は、言語を媒体にした解釈をプロセスの中心に置いていた時代から「フィットしている感じ」に焦点を当て、流れを創造的に折り合いをつけることを通して進む（The Boston Change Process Study Group, 2010）という捉え方にセラピーの焦点が移ったように、よりロジック重視から感覚へと根源的方向へと変化している。しかし、そうした二者関係の中でセラピーは何を目標にしているのかというところが明確に語られてこなかった。Freudは自律に照準を合わせた。Kohutは自己（の統合）に注目した。こうした視点は一者心理学の延長上であるが近年の相互の関係性に目を向けると、という本論は、セラピストのクライアントに対する応答性の在り方を包含しつつ、目標にするところはクライアントの「主体」者として存在している感覚の獲得であろうと考え、主体の観点から論を展開した。

## 【参考文献】

- 安藤治 (2003) : 心理療法としての仏教—禅・瞑想・仏教への心理学的アプローチ, 法蔵館.
- Balint, M.(1969) : The Basic Fault - Therapeutic Aspects of Regression.Northwestern University Press.
- Beebe B., Knoblauch S., Rustin J., Sorter D.(2005) : Forms of Intersubjectivity in Infant Research and Adult Treatment. Other Press.London. England.
- 丸田俊彦監訳(2008) : 乳児研究から大人の精神療法へ—間主観性さまざま—.
- Benjamin, Jessica (1998) : Shadow of The Other -Intersubjectivity and Gender Psychoanalysis. Routledge.
- 北村婦美訳 (2018) :他者の影—ジェンダーの戦争は何故終わらないのか—. みすず書房.
- Bion, Wilfred R.( 2005) : Bion The Tavistock Seminars.Routledge.
- Bion, W.R. (1962 b). Learning from Experience. London: Heinemann.
- Freud,S. (1914) : On Narcissism. Standard Edition ,14:69-102. London : Hogarth Press. 1957.
- 懸田克躬・吉村博次訳(1969) : ナルシシズム入門, Freud 著作集第5巻, 人文書院.
- Freud, S. (2011) : 道籟泰三, 福田覚, 渡邊俊之(訳).フロイト全集〈21〉1932 - 37年—続・精神分析入門講義, 終わりのある分析とない分析. 岩波書店.
- Kohut, H. (1971) : The Analysis of the Self. New York:International University Press.
- (水野信義, 笠原嘉監訳, 「自己の分析」, みすず書房, 1994).
- Kohut, H. (1977) : The Restoration of the Self. Madison:International University Press.
- (本城秀次, 笠原嘉監訳, 「自己の修復」, みすず書房, 1995).
- Ignacio Matte-Blanco (1988) “Thinking, Feeling, and Being. Clinical reflections on the fundamental antinomy of human beings and world” 福本 修書評 : マテブランコ著 岡達治訳『無意識の思考』.
- 岡野憲一郎 (2011) : 気弱な精神科医 Ken Okano. A Blog of an insecure psychiatrist .
- 鈴木聡志, 大橋靖史, 能智正博編 (2015) : ディスコースの心理学. 質的研究の新たな可能性のために. ミネルヴァ書房.
- Racker, Heinrich (1982) : Transference and Countertransference Paperback. Karnac Books Ltd.
- 坂口信貴訳 (1982) : 転移と逆転移. 現代精神分析双書. 岩崎学術出版社.
- Stern, N.B., Stern, D.N., Sander,L.W., Morgan, A., Harrison, A., Lyons-Ruth, K., (The Boston Change Process Study Group) (2010) : Change in Psychotherapy. A Unifying Paradigm. Boston Change Process Study Group Stern D.(1985) : The Interpersonal World of the Infant : A View from Psychoanalysis and Developmental Psychology. Basic Books, Inc.
- Stolorow, R., Brandchaft, B. & Atwood,G. (1987) : Psychoanalytic Treatment: An Intersubjective Approach. New Jersey : Analytic Press.
- 丸田俊彦訳 (1995) : 「間主観的アプローチ」, 岩崎学術出版.
- Stolorow, : R., : & Ateood, : G. (2013) : Metaphysicalizing experiential selfhood: Reply to Tomas Videgaard. International Journal of Psychoanalytic Self Psychology, : 8, : 121-125.
- Winnicott, D.W.(1971) : The use of an object and relating through identifications. In Playing and Reality, pp.86-94. London : Tavistock Publications.
- Winnicott.D.W.(1972) : Holding and interpretation -Fragment of analysis-. Donald W. Winnicott.
- 北山修監訳 (1989) 抱えることと解釈—精神分析治療の記録—. 岩崎学術出版社.